

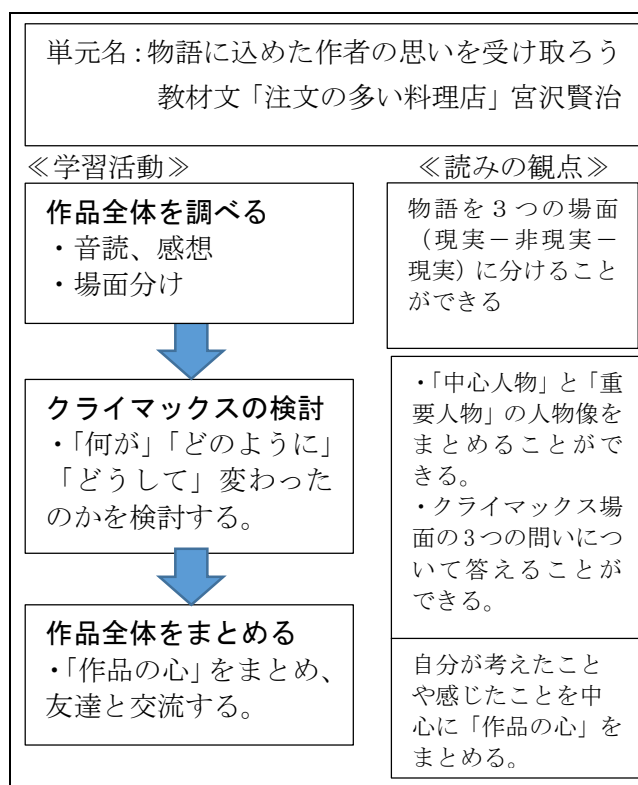
対話活動の充実を通し、一人一人が「作品を読む」力を伸ばす ～第5学年国語『注文の多い料理店』の実践を通して～

糸魚川市立糸魚川小学校 教諭 渡邊 興勝

1 はじめに

本校では、指導の手立てを指導内容、単元構想、学習活動、習熟・発展の4つの観点から考察し、全学級で共有する指導プランを「糸小プラン」と名付け、読みの観点を習得・活用する授業づくりに取り組んでいる。

高学年の重点目標は「クライマックス場面における中心人物の変化について考えたり、物語の主題について考えたりしながら、作品全体をまとめることができる。」である。それに基づき、単元の流れを右の図のように設定し、実践した。



2 指導のポイント—対話活動の充実—

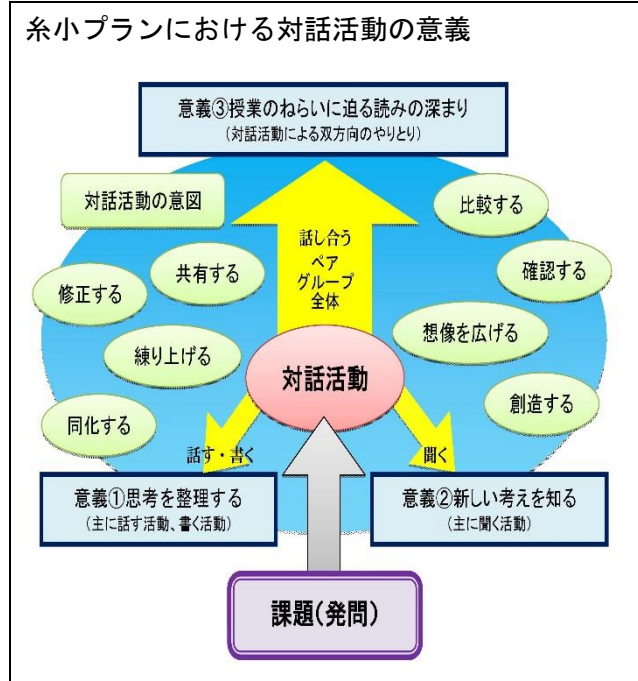
授業のねらいを学習者一人一人が達成できるための手段として、対話活動を重視する。大切にしている点は次の2点である。

① 何の目的に対話活動を行うのか、その意義をはっきりさせる。（右モデル図参照）

② 自己内対話の時間を確保し、自分の考えをもってからペア・グループ・全体対話へ進む。

本実践では、それぞれの学習場面に合わせて目的をもって対話活動を取り入れた。

他にも、全員が学習課題や経過を共有するために、全文プリントやセンテンスカードの活用、掲示物等の視覚的な学習環境作りにも心がけた。



3 授業の実際

(1) どこからが「非現実」の入り口か？

『注文の多い料理店』はファンタジー教材に分類される。現実—非現実—現実という作品構造を理解させたい。何度も教材文を読み、児童の中で意見が分かれたのは右の点である。

先行研究をあたってもどちらの意見もあることから、どちらもよく読み込んだ上の意見であることを認めた。その上で、明確に「場」が変わるのが意見①であることから、本授業では意見①の場面分けで学習を進めることにした。対話活動を通していろいろな考えがあることを知ったうえで、作品構造を理解させることができた。

発問：非現実世界への入り口の文をさがしましょう。

《自己内対話》

意見①

「風がどうとふいてきて、～」の文

意見②

「犬があわをはいて死んでしまった」文

《ペア→グループ対話》



同じ文が後半にも出てくるよ。これが入り口と出口だと思うよ。

犬が突然死ぬなんてありえない。しかも、後半生き返っているし。この時点で「非現実」に迷い込んでいるよ。



(2) クライマックスの検討から作品の心へ

この作品は、通常のファンタジーと異なり、現実に戻ってきたときに中心人物の心情や人物像に変化がない。変わるの「顔」だけである。ここをどう読み取るかが、この物語の作品の心を読み取る上で非常に重要になる。

発問：なぜ、あんなにおそろしい体験をしたのに、二人の人柄は変わらないのでしょうか。

《自己内対話》→《グループ対話》

危険なことも、過ぎればすぐに忘れてしまうから？

自分たちの愚かさに気付いていないから？

人間、そう簡単には変わらない？

発問：それでは、なぜ作者は二人のしん士の顔を変化したまま元に戻さなかったのでしょうか。

《全体対話》



恐怖が取れないのだと思います。

「あの恐怖を忘れるなよ」という意味だと思います。

悪いことをしているとばちが当たるぞという意味だと思います。

学習を総合的に振り返り、自分の考えを広げ、全体で共有することができた。作品の心につながるヒントを対話から得た児童も多かった。

4 おわりに

対話活動では、自分勝手な思い込みにならないように、叙述を根拠にすることを求めてきた。その結果、自分の意見をもつために、また、相手の意見を理解するために何度も本文を読み返し、納得しながら学習を進める姿があった。

物語文の読み取りについて、「詳細な読解に偏りがちな指導」からの転換が指摘されてから久しい。児童が必要感をもち、目的に応じて的確に読み取る力、自ら考えて読む力を伸ばすために、これからも対話活動を学習活動の中核に据え、実践を重ねていきたい。